

日本人の新しい

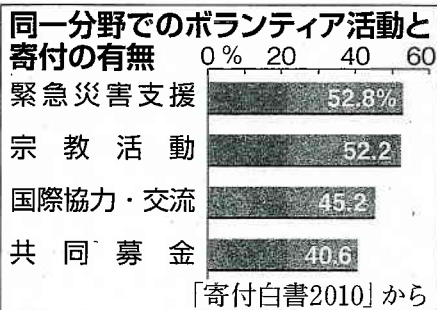
震災を越えて

「また、あなたにお願いしたいな…」

東日本大震災の被災者、岩手県陸前高田市の60代の女性は「足湯ボランティア」にそう告げた。避難所暮らしで不安を感じていた女性は足湯につかりながら、しばしの間、悲しみを和らげた。

① 寄付の精神

冊子の編集に携わった加納佑一さん。「コ・プレゼンス」(同じ場所にいること)。被災者と同じ時間と空間の共有



ボランティアと寄付の相互関係

日本ファンドレイジング協会の「寄付白書2010」(日本経団連出版)によると、ボランティア活動を行う人ほど寄付支出額も多い傾向がうかがえる。「緊急災害支援」と「宗教活動」では、ボランティアをした人の半数以上が同じ分野で寄付を行っていた。グラフ。寄付が社会に浸透するには多様な寄付機会に加え、「ボランティア機会の提供」も視野に入れることが必要だ。

「被災地をサポートし、自分は自分で頑張っていくつもりです」被災しなかった人たちができることは何か。「希望学」の研究を続ける東大社会科学研究所の玄田有史教授は「震災をすぐに過去のものとせず、自分たちができる形で応援し続けることである」(内橋克人編『大震災のなかで 私たちは何をすべきか』岩波新書)と訴える。

「コ・プレゼンス」の感覚を

たい」という心に訴えた。

支援のバトン

災害ボランティアは、がれきの撤去を行うだけの人材ではない。「声のアルバム」に、ボランティアに参加した20代の男性グラフィックデザイナーの感想が紹介されていた。

「個人的にはボランティアは最初で最後にしようと思っと思っています。それは後ろ向きな態度ではなく、自分の志した仕事を死ぬ気で取り組み、自分の仕事を通じ未曽有の被害をもたらした東日本大震災から私たちが多くの教訓を学んだ。震災以降の日本人の心の変化を検証する。」

(日出間和貴)

活動センター(東京・飯田橋)の「東日本大震災 被災者とボランティア 声のアルバム100」。災害ボランティアと被災者の心の交流がつつられている。

「被災者の中には、周囲への気遣いや地域性が影響し、要望を声に出せない人が多くいた。ボランティアが被災者に寄り添い、耳を傾けることで彼らは心を開いてくれる。災害ボランティアの仕事が完全にシステム化されたら、両者の交流は成り立たなくなる」と、

東日本大震災の発生時刻に合わせ、宮城県気仙沼市の地福寺の境内から被災地に向かい黙禱(もくどう)する学生ボランティア 昨年9月11日午後2時46分



大阪大学院、山内直人教授(公共経済学)

「大災害では、被災者のために『何かしたい』という気持ちで寄付やボランティアという行動に結びつく。東日本大震災で初めて寄付やボランティアをしたという人も多数いると思われ、底辺の拡大につながる可能性がある。しかし、阪神大震災では震災翌年、寄付もボランティアも震災前の水準に戻った。今回も動向を注視する必要があるだろう。」

阪神一〇の寄付は被災者への『義援金』が大半だった。しかし、今震災では被災地で活動するNPOやボランティア団

「震災翌年」が問われる

体をサポートする『支援金』も集められ、市民活動の財政的支援に役立っている。ボランティアに関しては、災害時の典型的なボランティアに加え、医療、精神ケア、法律など専門知識や技能を持った「プロボノ」と呼ばれるボランティアが幅広く活躍した。

税制改正で、寄付控除の対象となる認定NPO法人になるための要件が大幅に緩和された。しかし、改正の中身については十分に浸透しておらず、寄付者への周知を図る必要がある。寄付を受け取った団体は、寄付の用途を迅速かつ分かりやすく情報開示することが求められる」